

「名著選読」の意義

尾久幸子

(一)はじめに

私が東呉大学の日語系で三年生の「名著選読」を担当してから、すでに一年八ヶ月が過ぎました。今、私は過去の授業を省りみて、私なりの反省を試みたいと思います。

始めて私が、この科目を担当した時、その方針については漠然としていて、明確な授業プランを立てることが出来ず、ただひたすらに「学生に何か意味あるものを与えたい」という願いに賭けて授業を進めました。まず日本の高等学校用の国語の教科書の中の近代小説を中心として、その他、日本の近代・現代文学史上有名な作家の作品で、比較的学生が興味を持ちそうなものを選び、だいたい文学史順に教授してみました。

一週間に二時間という限られた授業時間であり、しかも日本文学を日本語によって読解するとなると、そのために費される時間は、予想以上のもので、結局一年間に読むことのできた作品は、ほんとうにわずかなものでした。今ここに、その年に読むことの出来た作品を読んだ順にあげてみます。

一、「舞姫」 森 鷗 外 (明23) 抜すいより全編を読む
志賀直哉 (大10、昭12) 後編 (十八) (十九) のみを読む

二、「暗夜行路」 芥川竜之介 (大7) 全編を読む

三、「蜘蛛の糸」 谷崎潤一郎 (明43) 全編を読む

四、「刺青」 武者小路実篤 (9) 下編のみ全部読む

五、「友情」 木下 順二 (昭24) 全編を読む

六、「夕鶴」 「サド侯爵夫人」 三島由紀夫 (昭40) 第三幕のみ読む

七、「サド侯爵夫人」 三島由紀夫 (昭40) 第三幕のみ読む
すなわち、小説が五編と戯曲が二編という結果になりました。このうち、

最も学生に人気のあったものは「友情」でした。読者と主人公の年齢が近く、しかも、テーマがわかりやすく、読者にとって身近なものだであり、表現も平易な日本語であったことが原因となっているようです。それに反し「舞姫」に対しては、私が予想したほど学生は興味も好感もいかなかったのです。最初の、しかも三年生の授業の教材として、文語体の作品を選んだことが、学生にとっては難解を極め、日本文学に親しむ上で非常に大きなマイナスとなってしまうことが、後になってわかりました。また「サド侯爵夫人」は、学生から三島由紀夫の作品が読みたいという希望があり、それは三島の代表作であり、ある意味では現代文学のシンボルとも言われるものだと思います、選んだのですが、プログラムの最終であり、時間においつめられ、十分な講義が出来ず、学生にとっては理解しがたいものとして終わってしまいました。こうした点において、第二年度目は私にとって深く反省を要することが多かったのです。

第二年度の新学期を迎えて、私は前年度の反省に基づいて、新しい計画を立てなおしました。そして教材として選んだ作品は前年度とはほとんど変わりがなく、ただその教授の順序を少し変更することになりました。

はじめに白樺派の志賀直哉を読み、次に白樺派に影響を与えた明治文壇の巨頭、夏目漱石を読む。(夏目漱石は「現代日本文学」の授業で、その名作のほとんどを読んでいるので「名著選読」の授業では随筆をとあげました)。次に白樺派と並んで明治末年から大正にかけて日本文壇を風靡した耽美派の谷崎潤一郎をとりあげ、耽美派に強い影響を与えた近代文学の巨頭、森鷗外を続けて読む。そこで近代文学は終了し、現代の戯曲を二編読むというプログラムを作りました。

一、「暗夜行路」 志賀直味（大10、昭和12）後編（十八）（十九）の全文を読む

二、「ガラス戸の中」夏目漱石（大4）（3）（4）の抄および（5）の全文を読む

三、「刺青」 谷崎潤一郎（明43）全編を読む

四、「舞姫」 森 鷗 外（明23）抄により全文を読む

五、「夕鶴」 木下順二（昭24）全編を読む

六、「サド侯爵夫人」三島由紀夫（昭40）第三幕を読む（予定）

この計画にそって各作品を読み終ることに宿題を出して、学生の理解度を計りながら進んでいます。今年度は国家の休日、あるいは学校の休日が重なり、昨年の授業時間に比べて、十時間ほど授業時間が少なく、進度もだいぶ遅れ、最後のプログラムはもっとやさしいものに変更しなければならぬことも考えられます。

（二）名著選読の教材について

私が教材の選択にあたって最も重視した点は「学生が興味を持つ」作品ということですが、どんなに名作として文学史上高い評価を得ている作品であっても、それに学生が興味を持たなかったら、学生が退屈を感じたり、読もうとする意志を失ってしまったら、その読解とか鑑賞とかいっても全く無意味になってしまいます。もちろん、一口に興味を持つと言っても、人それぞれによって、おもしろいと感じるものは異なっているでしょう。しかし、人間である以上、しかも年齢も、社会的な経験もほぼ同じ学生である以上、そこにはある程度の通点を見出すことは不可能ではないと私は思いました。そこで考えなければならぬことは「学生が興味を持ちさえすれば、それで良いのか？」ということですが、この点になりますと、「名著選読」の生命ともいえるべき課題となり、また「文学の意義」といった重大な問題に直接結びつくことにもなるのです。

考えてみますと、文学には二つの種類があると思うのです。その一つは、読者の興味をそそることを目的として、読者をおもしろがらせたり、楽しませたりすることだけを狙ったものです。こういう作品は読んでいる限りで

は、おもしろく楽しいかも知れません。しかし、読み終った後には、感動も残らなければ、深い意味を味わうということもないでしょう。つまりこうした作品の世界というものは真実の世界から遠くかけはなれてしまっていて、人間の表面的な世界のみを強調して作られたものだからです。

もう一つは、読者に興味を持たせることを目的としない作品で、しかも読者自身が自然に深い興味を持たずにはいられなくなるような文学です。そういう文学を創作する文学者達は、「人間とは何か」「人生とは何か」「生とは？」「死とは？」という、人間の存在の根源ともいえるべき問題に、何らの精神的な束縛をも持たずに、誠実に真けんに立ち向い、葛藤して、たどりついた境地、あるいはその過程を客観的に読者に示してみせてくれるのです。それ故、そこに読者は真実の世界、あるいは真実の姿というものを読みとることが出来、その結果、人間に対し、人生に対し、また永遠とか自然とかいうものに対し、深い興味をそそられ、そして、それを自己の問題として受けとめてゆくにちがいないと私は思います。

私達の人生に必要な文学というのは、前者ではなくて、後者であり、後者に属する文学こそ、「名著選読」の教材として最もふさわしいものであると思うのです。すなわち文学に対する興味を学生が受動的にうけいれるようなものではなく、能動的に求めて行くような文学こそ、この時間の教材とするべきものでしょう。学生が「名著選読」の時間に人間として自己を成長させるための養分を吸収することのできるような作品を教材とすることを私は切に希っています。

（三）各教材の目的

「名著選読」の理論的な理想像が出来上がったわけですが、つぎにそれを実行するに当って、どんな目的でその教材を選んだかについて、私の立場からふりかえって考えてみたいと思います。私としてもまだ「教材として使うのに、どこか不安を感じる」というものが、二、三ありますので、今回はそのような教材を中心にして、私の目的を考えなおしてみます。

まず、第一年度に「文語体であるので、非常に難しい」という理由で学生からあまり好評を得られなかった鷗外の「舞姫」をなぜ第二年度にもひき続

き教材としたかという点から触れていきたいと思ひます。

「舞姫」は明治時代の中頃に発表された。囂外の青春時代の作品として囂外の作品の中でも高い地位をしめ、日本では今日でも多くの読者を持つてゐる作品です。

あらすじは太田豊太郎という秀才の留学生がドイツで「自由なる大学の空気にふれ」、自分を「生きた辞引、生きた法律」にしようとする故国の社会の要求に疑いを持ち出した時、偶然エリスという美しい踊子と恋をして、故国からあるいはドイツの在留日本人の仲間からも見すてられてしまひます。しかし、エリスと同棲し、貧しくとも恋と自由を楽しむ生活に喜びを感じていましたが、やはり故国の社会との絆も断ち切れず、天方伯爵や親友相沢の勧めに従つて、結局栄達の道をえらび、エリスをすてて、帰国しますが、エリスはそのために狂女となり、豊太郎も内心に深い傷を負うというものです。

この作品を教材としてとりあげた最も大きな理由は、美しい雅文体によつて描かれるエキゾチックでロマン的な豊太郎とエリスとの恋の中で苦悩する近代青年の心理を読むことは、学生にとつては、興味深いことに違ひないと思つたからです。しかし、第一年度には、学生の日本語の能力と私の講義の仕方の問題があつたため、ほとんどの学生は、この雅文の美しさが解かれないまま終つてしまひました。さらに苦悩する豊太郎の立場を考えることが出来なかつた。すなわちこの作品のテーマを理解することが出来ない、という大きな問題を残してしまひました。私はいく度か、このテーマにふれて説明をしたのですが、読書経験の極めて少ない学生の目は、単に悲しい恋の結末のみにとらわれてしまひ、悲恋の物語としてしか理解出来なかつたのです。しかし、私としては古い封建的伝統的な日本の社会とヨーロッパの人間尊重の個人主義社会との間に立つて苦悩する青年豊太郎は、時を越え、国を越えて、学生にとつても身近な人間として、とらえることが出来、また、古い社会をすて、新しい社会に生きることを誓つた自分を、自分自身でうらぎつてしまふ人間の弱さと、その結果生まれるいやし難い苦悩というものも、私達が生きていくうえで、充分に考えてゆくべき価値のある問題だと思ふのです。

自分の生きている社会に、あるいは自分自身に、盲目的に従つて生き易い私達に目覚めることを教えてくれる作品として青年時代にぜひ読んでおくべき小説ではないかと思ひます。さらに、作品の鑑賞の仕方という点においても、作品をことばの上からだけの理解にとどまらず、行間を読むことによつて、もっと深く理解することを学ぶ上で悟りやすい作品ではないかと思ひます。それ故に、私はこの作品を第二年度にも採用したのですが、講義の進め方については、昨年度の欠点を最小限にとどめ、私の目的を出来るだけ強調するように努めました。

日本語科の学生として、日本語を上達させるという意味では、この作品はあまり価値があるとはいへないかもしれせん。しかし、大学生として知識欲の盛んな、また人生に疑問をいだきやすい年齢である学生は、常に何かを求め満たれない思ひをしていることも事実であり、そうした学生生活に人間としての意味を添えるために、語学的な考え方を越えて、また、少々無理のあることも承知のうえで、やはり「舞姫」に教材としての価値を認めないではいけないのです。

次に志賀直哉の「暗夜行路」の一部を教材としたことについて、考えてみたいと思ひます。

この教材に対しては、二つの大きな目的を持っています。その第一の目的は、志賀直哉が属してゐた「白樺派」という文学運動の文学史的意義をとりあげることです。私は「名著選読」の第一時間目に日本の近代文学について予備知識として、明治の開国以後から明治末年の「自然主義文学」の隆盛に至るまでを簡単に説明しておきますので、その後には日本の文壇を受け継いだ「白樺派」の文学史的意義を、考えてみることにある意味を感じるのです。

明治の開国当時は西欧からのおくれをとりもどすために功利的な考え方が持つことの出来なかつた日本の社会では、文学をはじめ藝術一般に対しては全くその価値を認めなかつたというよりも、かえつてそういうものを卑下する傾向さえあつたのです。しかし、西欧との交流が深まるにつれて、次第に西欧文学の影響も受けるようになり、明治の中頃には「文学は道徳や教訓

や・政治の宣伝手段ではない。文学は藝術である」という近代文学の概念が確立されました。そして、文学は人間の精神生活に欠くことの出来ないものとして評価されるようになり、時代思潮の影響を受けながら、浅はかな西洋のまねを反省する「復古主義」、主情を謳歌した「ローマン主義」などを経て、明治末期には自然科学の影響を受けた「自然主義文学」が発生するに至りました。

自然的存在としての人間の本能や欲望や素質を認め、理想を求めたり、あるいは醜惡なもの、瑣末なものを避けたりせず、人間を現実のあるがまの権威から解放することに成功しました。すなわち、道德の既成概念や旧い威は力を失い価値を失墜してしまつたのですが、しかし、現実をありのままに写すという主張にとらわれすぎたために、自然主義文学によって描かれる世界は、次第にたゞ単に平板無味な、しかも醜惡な日常生活だけとなり、そこに人間の精神の荒廃と空白状態がもたらされました。その精神の荒廃と空白状態からの再建を使命として生まれたのが「白樺派」の文学なのです。

志賀直哉をはじめとする白樺派の人々は、貴族あるいはそれに近い階級の子弟であり、彼等はめぐまれた環境によって、生活の余裕と思考の自由が与えられ、そのために人生に対する疑惑を育て、社会の不合理を憤る正義感を保つことが出来るので、狭隘陰鬱な自然主義文学に対して白樺派の文学は、生活の汚れに染まらない若々しい情熱にあふれたものでありました。以上のような日本の近代文学史の概略を知つて後、いよいよ志賀直哉とその作品に入ります。

第二の目的は、志賀直哉の「生い立ち」と「文学の特徴」を関連づけるが愛されたかわりに、母親に早く死別し、父親とは親しみの薄い家庭に育ちました。そして、のちにそこに思想的対立も加わって、父親との葛藤が彼の「暗夜行路」にもそれが重要な背景として用いられています。また志賀直哉は鋭敏すぎる感受性のために俗界や俗人に反感を感じ、さらにキリスト教や

社会主義の思想にたよって生きることも出来なかつたので、結局、彼の感受性に誠実に生きることを支えとして、自分の求める人生を摸索して行かなければなりませんでした。

志賀直哉自身のこの人生の苦痛をもっと純化したのが「暗夜行路」の主人公時任謙作の生き方であり、謙作が自然との合体のなかに安心を見出すまでの半生を描いたこの長篇小説は、現在でも多くの青年の心を捕えずにはおます。教材となつてゐるばかりでなく、文学者の間でも讀美的になつていや名描写として名高い志賀文学の文章の妙味も充分に味わうことの出来るのだと思います。しかし日本語の経験の未熟な学生がこの作品から私達日本と同じように感銘を受けるためには、私としての責任も重いわけで、そのための方法などについて現在摸索を続けている状態です。

白樺派とその代表的作家志賀直哉についての鑑賞にひきつゞき、白樺派と時を同じくしておこつた、反自然主義の文学運動「耽美派」の文学史的意義として選びました。それ故、この場合も「暗夜行路」の場合と同様二つの目的をもつていきます。

その第一は「耽美派」の日本の近代文学史的意義を「白樺派」と比較しながら考へてみることです。すなわち、自然主義者によって道德の既成概念や生活に生きる人間となり、生きる意欲を奪われてしまふという結果になつたのですが、このようになつた「人間」に個性を与え、また積極的に生きる根拠をあたえることを使命として生まれたのが、「白樺派」であり、「耽美派」でありました。そして、独善的ともいわれる熱烈な人道主義をとつた「白樺派」に対して「耽美派」の人々は、封建道德の遺習の強い当時の社会で、人間の快樂そのものを罪惡視する世間の良識に強く反抗する精神を持つてゐた。それ故、彼等はその作品において憚るところなく、遊蕩の世界を描いて女性の美を真正面から讚美し、恋愛あるいは官能の「歡樂」を生きる目的であると主張しました。「耽美派」の人々は、こういう点で、同時代の人

々より一步進んだ新しい頭腦の持主であつたのですが、しかし、彼等の作品のほとんどが男性中心のエゴイズムの世界を描いており、女性の位置をみるならば、女性は男性の「歡樂」のための道具として扱われているのです。この男性中心のエゴイズム脱却して、女性を世界の中心におき、その魅力に従順に屈服し、跪拝する官能の陶醉のなかに男性の幸福を見出す世界を描いたのが谷崎潤一郎でした。

私が教材としてとりあげた「刺青」は谷崎潤一郎の処女作であるのですが、ここで彼はすべての男性は女性の美を輝やかすための「肥料」であるとして描いています。さらに彼はマゾヒズムやフェチズムなどの世界を描いて明治現代の文壇に於て今日まで誰一人手を下すことの出来なかった、或ひは手を下そうとしなかった藝術の一方面を開拓した成功者は谷崎潤一郎氏である」という、最大級の讃辭を当時の文壇の大家永井荷風（耽美派の創作者）から贈られました。

上述の耽美派の中でも特異な存在である谷崎潤一郎のもつ性格を予備知識として、實際に「刺青」の作品鑑賞に入るのでありますが、これも「舞姫」と同様、日本語の表現としては相当困難な問題を含んでいるために、教材とする場合大きな不安を感じるもの、一つです。

しかし、文学史的な立場から見ますと、この耽美派の持つ意義は、人間にとって見逃すことの出来ないものであり、自然主義的な、あるいは白樺派的な、あるいは耽美派的な立場に自分をた立せてみることは、学生にとつて、より広い視野から人間を理解するうえで意義深いことではないかと思うので、敢えて教材として選びました。特に耽美派の文学などには、偏見を持ち易い保守的な社会に育っている学生の考え方を広く健全に育てるためには、すぐれた文学作品によることが最もふさわしいことであると私は思います。

以上三つの教材について私の意図することをまとめてみました。が、よみ返してみて、不十分な感じを抱かざるを得ないし、また、私の意図を生かすために如何に教授すべきかという立場から綿密な計画を同時に立てる必要があるのですが、今回は期限もせまっているので、次回の課題として残すことになりました。（日本文学・講義）